



三木みどりは1989年徳島生まれ、京都嵯峨芸術大学を卒業し、現在は東京藝術大学大学院美術研究科油画研究分野に在学している。京都時代から果敢に活動を繰り広げ、今回の個展はこれまでの活動を収めた写真集『三木みどりの「かわいい」2010-2012』の出版記念も兼ねている。

嵯峨芸術大学教授・現代美術作家の宇野和幸がフライヤーに「三木みどり個展に寄せて」を記しているので引用する。「誰しものが矜持と言われるものを持っている。…三木の場合はそれが「かわいい」であり「かわいらしさに徹底すること」なのである。…愚直にまでに大量のフェイク菓子を作り並べ、張り巡らせ、山積みされるそれらを見ると、その「かわいい」に妙に説得させられてしまう。…三木は基本的に制作物と共に展示会場にいる。…展示+パフォーマンスということではなく、制作物や本人との場の状況や時間を含めた関わりの在り方、総体としての出来事そのものが作品になっているということだ。」

三木のモチーフは「菓子」の「かわいい」であり、大量にフェイクを作成して山積みし、本人が会場にいる状況は活動当初から続いている様子である。三木は今回、ピンクのプールを10個会場の床面に犇きさせ、その中と境界の役割をさせる外側に星型クッキーを大量に鏤めた。フェイククッキーはラッピングされているものと裸体のものの二種類がある。その割合は、計り知ることができない。

論点は三つある。一つ目は、フェイククッキーの形が総て異なる、即ち手作業であることにある。ここからモダニズムに対するローカリズム、若しくはグロピウスの持つパウハウスの意義を読み取ることが可能となる。二つ目は、壁面に対する作品の低さにある。ホワイトキューブの圧迫感を引き出している。三つ目は、「かわいい」と「本人がいる」ことが、自己愛と完全に乖離していることにある。作品は独立し、三木は三木でありながら三木でないのだ。三木にはこのスタイルを暫く貫き、探求して欲しい。

